

豊明希望チャペル礼拝

2026/8/23

「悪に悪を返さず」

ローマ人への手紙 12：14～21

今日の箇所で、非常に印象的なのは、イエス様がおっしゃられたキリスト者が「敵を愛する」ことの強調です。ざっとその箇所だけ最初に引用します。ほぼ全部とっていいほど、その点が様々な視点で繰り返されますが・・

「12:14 あなたがたを迫害する者たちを祝福しなさい。祝福すべきであって、呪ってはいけません。」

「12:17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人が良いと思うことを行うように心がけなさい。」「12:18 自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。」

「12:19 愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。」

「12:20 次のようにも書かれています。「もしあなたの敵が飢えているなら食べさせ、渴いているなら飲ませよ。なぜなら、こうしてあなたは彼の頭上に燃える炭火を積むことになるからだ。」

そして、締め言葉はこうです。

「12:21 悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」

15、16 節を除けば、全部ということになります。

ちなみに、15、16 節は、敵ではありませんが、「泣く者」「身分の低い者」という、自分にとっては、あまり楽しくない相手と思われるような人と積極的に交われというパウロの言葉であって、自分にとって、また一般的に、敵の次に交わりたくないと思われる人たちを指して、敵を愛するのと同じように、弱いと思われる人をこそ、愛するようにと言うことでは、同じベクトルというか、方向性にあるメッセージとなっています。

一つ一つの御言葉を、じっくり噛みしめてもいいのですが、まずは、これだけ繰り返される敵を愛するべきである、悪に悪を返さず、かえって迫害する者を祝福し、飢えているなら食べさせ飲ませよ、敵にこそ良くしてあげなさい。それが、クリスチャンのこの世での戦い方だと、そう、「善(よいこと)をもって、悪に打ち勝つ」という戦い方だといわれていることをしばらく見つめて下さい。(→黙想)

太平洋戦争の終戦から 81 年がたちました。少し、思いを巡らしましょう。昔、宣教地研修旅行というツアーがあって、宣教師の案内で、フィリピンを訪問したことがありました(1995 年)。フィリピンはかつて、スペインの植民地とされ、アメリカの支配下に長く置かれ、太平洋戦争中は、日本軍によって占領されました。



(←日本軍進軍)

あるお年寄りと話していました。彼は言いました。私の父の時代、マニラは、日本軍のよって占領されました。一列に並べられ、私の親戚や知人がみな、銃で撃ち殺されました。戦争中でしたからねと語り、日本の占領の後、フィリピンは独立しましたから、そ

のきっかけを作ったこのだと受け止めていますというような意味のことを言われました。私たちが、クリスチャンであることに遠慮して、そのように語ってくれたのでしょうか・・・

JECA の東京の立川駅前教会を開拓した先生は、ローリン・リーズナー宣教師でした。アメリカミネソタ州出身の若者は、衛生兵として、太平洋の島々に従軍していました。そこで、激しい日本軍との戦いを経験しました。戦争が終わり、彼は、日本人を愛するために、再び日本に宣教師としてやってきたのです。彼はある日、私にこんなことを言われました。いまだに、私は、夜、その日本軍との戦いのことを思い出して、うなされ、飛び起きてしまうのですと。戦いが終盤になって、決着がつけかけたとき、日本軍の兵士達が、「バンザイ」と言って突っ込んでくるのです。その、「バンザイ」の声が、いまだに頭から離れず、そのバンザイの声で夜、起こされるのですと。今のセンド宣教団は、かつては、極東福音十字軍(Far East Gospel Crusade)といい、太平洋戦争終戦直後の日本に進駐したアメリカ軍の従軍牧師とクリスチャン軍人たちが日本人の救霊のために、1945 年 9 月 15 日に横浜海岸教会で、GI・ゴスペル・アワーという伝道集会を開いて、その集会をはじめとして、1947 年に設立された宣教団体です。その働きで召命を受けた、軍人によって、日本と戦うためではなく、主の兵士として、日本人を愛するため、救うために戦う兵士としてやってきたのです。

2004 年に、宣教師の故郷のアメリカの派遣教会に行かせて頂いた、私の希望で、ア



メリカで一番大きい、時計博物館に行かせてもらいました。ちょうど休館日であったのですが、わざわざ日本から来たのだからと開けていただいて、その後、しばらく見学しました。その後、時計図書館にいたとき、ひとりのアメリカ人のご高齢の男性が近づいてこられました。私が牧師だと知ってか知らずか、あなたは、ミツオブチダを知っているか？と言われたのです。彼は、真珠湾攻撃で、アメリカのハワイを奇襲したときの、零戦の指揮官だと言いました。不覚にも、その名を、私は知りませんでした。彼が宣教師となって、アメリカの各地を講演して、私はその講演を聞いたのだと言われるのです。知っているか？と。

日本に帰ってから、あらためて、彼のことを調べました。アメリカ人の彼の言うとおり、彼は、元真珠湾攻撃隊長で、戦後クリスチャンになった人でした。戦後、C 級戦犯として戦争犯罪人として裁かれました。淵田さんは、軍事法廷で公平な裁判が行われないことに怒りを感じていましたが、入れられた収容所で、ある女性に会います。



彼女の両親は宣教師であったが、スパイ容疑でフィリピンにおいて日本軍に処刑されていたと知ります。しかし、両親は死の直前まで、「父よ、彼らを赦したまえ。そのなすことを知らざればなり」と、日本軍への赦しを神に請うていたと彼女は言うのです(←真珠湾攻撃では米兵 2400 人が死んだ)。そして彼女はそんな両親の遺志を継いで、ここであなたがたの御世話をさせていただいていますと言うのです。その話を聞いた淵田は半信半疑でしたが、続いて昭和 23 年(1947)、かつて日本本土を爆撃したドーリットル隊の一員で、中国で日本軍の捕虜となっていたジェイコブ・デシューザーが、「汝の敵を愛せよ」の基督教の人類愛で敵意を克服し、宣教師として来日したことに衝撃を受けます(←淵田と、デシューザー宣教師)。それから淵田は聖書を読みふけり、ついに洗礼を受けてキリスト教徒となりました。「敵意を克服しなければ真の平和は得られない」という思いからだったと後に、彼は言うのです。

彼が宣教師となり、アメリカに渡ったのは、その後でした。時計博物館であった男性の話はそのことだったのです。彼が、何を私に伝えたかったのか、英語があまり出来ないので、深い話しは出来なかったのですが、その経験が彼の人生をささえているほどの深い経験であったことはわかり

ました。

「敵を愛する」というテーマが、実際にはいかにむづかしく、しかし同時に、時に歴史を動かし、人の人生を変えるのだということを深く知ったのだと思います。

そして、これらの私の経験が、私がクリスチャンであること、キリストが、神の敵であり、赦されないはずの罪人である、私たちを愛し、赦して、私たちは救われた、私たちクリスチャンはそういう存在であること、敵を赦す愛によって赦された存在であることを、あらためて確認する事であったことを思ったのです。基督教の中心、クリスチャンのアイデンティティ、存在の意味の中心は、この「敵をも愛する愛」にあるのだということをあらためて、深く強く感じさせる出来事であることを、強く感じるのです。

今一度、今日の箇所を、この「敵を愛する」愛とは、どういうことか、私たちは、それを実行できるのか、どうしたらいいのか、黙想しながら確認してまいりましょう。

「12:14 あなたがたを迫害する者たちを祝福しなさい。祝福すべきであって、呪ってはいけません。」

ローマ人への手紙の時代の後から始まる、この時代は、200 年以上にわたる、迫害の時代でした。迫害の理由は色々とあります。ネロの時代は、ローマの大火の責任をクリスチャンにおしつけられたからとか、ローマの神々を拝まなかったから無神論者だとか。その時代を迎えるクリスチャンの心構えとして、パウロは、敵を愛する備えを彼らにさせたということは驚くべきことだと思うし、キリスト教ってすごいと思うし、少し引いてしまうほどの、不気味さえも覚えます。しかし、パウロは、これこそ、むしろキリスト者の強さだと言うのだと思います。

次の 15, 16 節は、最初に少し触れましたように、「敵を愛する」とは違いますが、自分にとっては、敵と同じくらい、あまり関わっても、特にはならないそういう、泣く人、身分の低いといわれる人に寄り添い、彼らをこそ愛するのが、キリスト者の心得だと言われるとき、同じ動機、同じクリスチャンの価値観を思います。

「12:15 喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい。12:16 互いに一つ心になり、思い上がることなく、むしろ身分の低い人たちと交わりなさい。自分を知恵のある者と考えるてはいけません。」

NHKの「こころの時代」で、カトリック司祭の本田哲郎神父の話を聞きました。本田さんは大阪の釜ヶ崎の街にある労働者支援施設「ふるさとの家」で生活相談や支



援活動が続けておられます。何より本田さんは、この街で暮らしているのです。ここに暮らして二十年、2 畳¥17,000 のアパートに住んで、街の人々と生活を共にしておられます。彼は、共同訳聖書の翻訳者の一人でもある聖書学者です。そして、彼らに仕えることを、たとえば障害者の介護させてもらっていて、一生懸命やるけれども、その障害者、当事者と同じところには立て

ない。どんなに頑張っても立てない。彼らに仕えるとは、そこのところをわかって関わる。そして、(謙遜な姿勢の中で)相手のいうことをしっかり真摯に受け止める。そういう事だと言われたことを印象深く聞きました。ここにパウロの言う、互いに一つの心となって交わるとはそういうことだと黙想しました。

さて、パウロは、再び、敵を愛することのテーマに戻ります。20 節まで今一度一気に読みます。

「12:17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人が良いと思うことを行うように心がけなさい。」

「12:18 自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。」

「12:19 愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。」

「12:20 次のようにも書かれています。「もしあなたの敵が飢えているなら食べさせ、渴いているなら飲ませよ。なぜなら、こうしてあなたは彼の頭上に燃える炭火を積むことになるからだ。」」

もし、復讐すべきだと思っていても、あえて、パウロは、その私たちの心にも触れ、迫害している相手をただ赦せでは、その行為を肯定することになるのではないかとの質問に、その場合は、神が復讐されるし、相手の頭に炭火を積むことになる、なにも、それを神に願って愛するというわけではないが、復讐も、炭火を相手の頭に乗せることも、神さまにやっていただいて、あなたは、止めておきなと、ローマのクリスチャンにパウロは言うのです。

さて、ここまでクリスチャンの生き方、考え方、そして、その愛し方について教えられ黙想してまいりました。今の、戦いが止まないこの時代にもっとも聞かねばならない言葉であります。ありますが、同時に、あまりにもむつかしく、だったら私は、損ばかりするのではないか、いや危険でさえあるのでは、少なくとも私には出来ないかもと思うのかも知れません。

パウロは最後にこう言います。

「12:21 悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」

この生き方、この考え方はキリスト者が勝利するためだと。

愛して、敵が悔い改めれば勝利。愛して、反撃され苦しめられたら、神が報復し、神が、義を実現して下さるから勝利。いずれにしてもクリスチャンにとっては勝利だと。

この週。このクリスチャンのアイデンティティとも言うべき、生き方を、少しでも心がけ、主のあわれみによって、この勝利の歩みを、実行させて頂きたい、そのように祈って進みたいと願うのです。